冒険探検粉塵記 11

改訂版

駄作者　文福洞先斗

2017 年から 2019 年・・まで続く

お断り：本改訂版は自然文化誌研究会会報『ナマステ』連載のエッセイに加筆修正するとともに、余話を追加しています。内容には事実と虚構が混ざっていますので、そのままを信じないようにご注意をお願いします。

第 12 話　やっと間に合った男の後塵

牛の蹄のあとの水たまりの中にとじこめられ、また彭祖のような長寿をもたぬわれわれには、景きな風に乗って疾やかに天空を遊行し、神馬をかけて遐かな土地を観るすべもなく、ただいたずらに日月星辰をながめやって、思いを大地の八方の果てに翔けらせるだけなのである。（魚豢 AD3C？）

歴史を探ることは郷愁ノスタルジーからではないと思います。古今東西の正史というものは、大方、英雄伝であって、大多数の庶民の生活誌についてはほとんど書かれてはいません。たとえば、『三国志』（陳寿 AD3C、今鷹・小南訳 1993）を見ると、「魏書」もほとんどが英雄伝です。当時（弥生時代末から古墳時代初）の「地理的日本」については「烏丸鮮卑東夷伝」の一部「倭伝」に記述があります。やはり大方は小諸国についての記述に費やされていますが、少しだけ、「禾稲や苧麻を植え、蚕をかってそれを糸に紡ぎ、・・倭の土地は温暖で、冬夏にかかわらず、生野菜を食べ、誰もがはだしである。・・」など生活誌の記述があります。ちなみに、禾稲を訳者はイネとしていますが、禾は本来、アワのことなので、アワとイネを栽培していたということです。｛注：「魏志倭人伝」は『魏略』（魚豢）による。｝日本で最も古い水田遺構のある菜畑遺跡（佐賀県唐津）も、丘の畑ではアワを栽培していました。

そこで正史英雄伝ではない個人史の意味は歴史的に庶民の生活誌を継承するうえで、大切のものであると思います。しかし、これまでの経験からして、個人というものは自己中心的にしか物が見えないようです。もちろん例外的に、広い視野で深く洞察できる人もいないわけではないですが、・・・。

たとえば、大学勤めをしてきて、学生の皆さんの自然体験について 40 年間にわたって問うてきました。彼らはおおよそ 1956 年から 1996 年ころまでに生まれた人びとです。この間に日本国は「高度経済成長」を遂げた後、「バブル経済」が崩壊するに至りました。自然環境は経済成長を支える開発によって著しく荒廃し、また、都市化の進行で一層人々の自然離れが進んできました。生活誌が大きく変化したと考えられる期間です。

それにもかかわらず、年ごとの学生の皆さんは同じように、「自分の子供時代は自然があってよかったが、今の子供たちは自然の中で遊べずに可哀そうだ」と意見を述べていました。自分たちはやっと間に合ったが、後輩たちは可哀そうなものだと言っているのです。アメリカはミシシッピー河のトムソーヤたちのように、敗戦後、木曽川中流で和船をこいで命がけで遊び呆けていたポンちゃんからすれば、学生の皆さんの自然体験など、あまりに細やかなことに思えてなりません。それでも 40 年間、「自分たちは良かったが、・・・」と聞き続けてきましたので、このことは大方の若者たちはまだ自己中心的にしか、経験を位置づけられないということを示しているのだと考えました。自己中心的が悪いと言っているのではなく、まずは視野が時空間的に広がっておらず、自己の自然体験の位置づけが狭すぎる点で、個人的体験の学習に問題があったのではないのかということです。

一方、別の見方をすると、後塵を拝し、間に合わなかった人々はどのように感じ、考えているのでしょうか。ポンちゃんの老師阪本は、自分は消えゆく雑穀に「やっと間に合った男」だと言いました。別の老師降矢は、自分は「最後の山村農」だと言いました。悲壮感、ヒロイズムなのか、督励、遺言なのか、老師たちの言葉に棘はないのだと思います。ポンちゃんは彼らの弟子として、学問と山村農を継ぐ者と自らの人生を律してきました。でも、間に合わなかったと断じられては続く我らに存在意義がなくなります。我らは縄文農耕や生業の知識と技能とともに、いわば黙殺、抹消されてしまうのでしょうか。稲作が弥生時代に伝わったのがこの地理的日本の農耕の始まりだという仮説が、縄文遺跡からの栽培植物の発掘を否定し続けてきました。

しかし、佐々木高明（2013）が言ったように、考古学者や日本民俗学者による仮説訂正は何の言い訳もなく、今日ではいつの間にか縄文農耕はおおよそ常識となっています。仮説は新たな研究成果によって、改められていくものですが、それは事実に基づく情理に沿うべきです。縄文遺跡から雑穀、豆、麦などが発掘されるばかりではなく、現在でも雑穀は山村の篤農によって細々とはいえ栽培され、生き続けている、この事実を継承することが重要なのです。ところが、このくにの人々は生業に伴う伝統的知識体系、生物文化多様性の技能について、失ってはならないこととは思っていません。誠に残念で、悲しいことです。

このように、栽培植物の在来品種も、我らマイノリティも少数民族も消されまいと、現代世間に抗っているのだと思います。また、冒険者とはこうした抗う者たちだと思います。たとえ間抜けな人間と言われようと、間に合います。自ら学び、千年先を直観して、今、為すべき、かつ、できることを後世のためにしておきましょう。私たちの想いは時空を超えて巡らすことができます。優れた冒険家たちの「カリバー旅行記」「ユートピア」「すばらしい新世界」「1984」などを読み、ポンチャンも「生き物の文明への黙示録」を綴っています。正史だけが歴史録ではなく、個人史を記録しておくことは、自己にとっても社会にとっても大事なのだと思います。

常に庶民を消し去ろうとする争いの時代から、趙行徳が敦煌の莫高窟に書籍を守った行為に習って（井上靖小説）、この地の生き物に関わる生業文化を保全、継承したいと強く意思します。

AI ではなく人類の想像力 SSF(Social Science Fiction)に希望を託します。たとえ、我らが忘れ去られようとしても、植物は創造的進化を止めず、一等植物研究官 E.T.やごみ処理ロボット WALL-E は千年紀を超えて植物文化をファンタスティックに復活させてくれるでしょう。

写真：上は、岡部さんが保存している雑穀在来品種の種子に見入る冒険者たち。下は、ポンチャンが失敗した陸稲畑。雨ばかりの夏で雑草を取り切れず、陸稲（手前）の生育が貧弱、出穂アワ（真中）はこぼれだねから生えた。

第 13 話　花のように生きなくなった日本人

V.W.ファン・ゴッホ（1888）は親愛な弟テオへの手紙に、ある日本人たちのことを次のように書いてくれた。「かくも単純で、あたかも己れ自身が花であるかのごとく自然のなかに生きてい

るこれらの日本人がわれわれに教えてくれることこそもうほとんど新しい宗教ではあるまいか。もっと大いに陽気になり、もっと幸福になり、因習の世界での我々の教育や仕事に逆らって自分たちを自然へと立ち返らせることをせずに、日本の芸術を研究することはできないように思われる。」

妖怪人間ベムは「早く人間になりたい」と言う。「ある実験により1つの細胞が分裂して生まれた、三人の“妖怪人間”ベム・ベラ・ベロ。彼等は、人間に勝るとも劣らぬ優しい心を持っているにも関わらず、その醜い容姿ゆえに人間から迫害され続け、人間になる方法を探し求め数十年間に渡って街から街へとさすらい続けてきた（ウィキペディア 2017)。」彼らもきっと阿修羅なのだ。

阿修羅とは古代インドの神の一族、後にはインドラ神に戦いを挑む悪神とされる。仏教でも天竜八部衆の一として仏法の守護神（8種の異類）としながら、六道の一として人間以下の存在とされる。六道とは、衆生が善悪の業によっておもむき住む六つの迷界、天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道のことである（広辞苑)。長野善光寺に6菩薩像があり、それぞれの道の衆生を救おうとされている。

ポンちゃんはもう一つの阿修羅として生きると意思した（木俣 2005)。この時のエッセイを要約する。ひろさちや（2005）が『わたしの中の阿修羅』で、傲慢不遜の心をもって天を仰ぎ見る阿修羅に「汝、諦めるべし」と言い、ジョージ秋山（1970）の『アシュラ』、萩尾望都（1995）の『百億の昼と千億の夜』の阿修羅、新美南吉（1992）の『ごん狐』は阿修羅の想いを描き、さらに、宮沢賢治（1923）は『春と修羅』で「おれはひとりの修羅なのだ」と詠っている。山の神の使いである門男になりたいポンちゃんも阿修羅なのだ。

このくにの人間はゴッホが想ったように花のように美しいのかを問いたい。彼らが「人間道」にいても、実は（餓鬼道や地獄道にいて）人間の振りをした野獣か、野獣の皮を被った似非人間であり、その心性があまりにも醜いのなら、私は阿修羅のように、美しい人間になるため、解脱に向かって修羅道を生きたい。心を開いて孤独を求めず、勇気を励まして孤立を恐れないようにしたい。このために、今、解いておきたいこのくにの3つの謎がある（黍稷農季人 2018)。

第一の謎、何故に現世の人々は先人の生活文化、庶民の歴史に関心がなく、先祖への敬意を失ったのか。過剰な都市の便利に幻惑わされて、自然離れし、生業を忌避して、人間であることを自己疎外しているのだ。自然や先祖とのお付き合いを失ったら、文化的に、精神に変調をきたすだろう。先人の自然を基層とする文化は山村に何とか今でも残っている。ここから、都市民は自然との付き合い方、祖先の生き方を学ばなければならない。山村には伝統的知識と技能を伝える現代的な仕事、職業が希求されるのだ。

第二の謎、何故に自然文化誌研究会の環境学習活動は有耶無耶のうちに地域社会の有力者から四度も追放されてきたのか。お付き合いしている方々はとても親切なのに、私費でかつ任意の労力も地域社会に提供しているのに、さらに経済効果も高いのに、大いに地域に貢献しているのに、何故に有耶無耶の不情理によって追放されるのか不思議で仕方がない。浅い付き合いまでは為政者が利用できるので都合も良いが、恐らく、行政の仕事範囲を超えた成果が出て、村の変容に踏み込み始めたと為政者に解釈されると、彼らの領分を侵犯し、面子を潰したとして、その後は弾き飛ばされるのだろう。自然を忘れた無知な都市民が恥知らずに山村を軽視し、恩知らずに犠牲を強いてきたため、山民の誇りが痛く傷つき、脆弱になったからに違いない。それで排除されて

も、もうポンちゃんは山村から逃げ出さない。

第三の謎、何故に地域社会を守るために働いた人々を、地域社会は黙殺してきたのか。明治維新の功罪のなかに隠蔽された「重罪」である。明治の半ばには大方の抵抗は鎮圧された。自由民権の徹底した弾圧（治安維持法）が恐怖を刷り込み、地域社会は沈黙したのだろう。足尾銅山鉱毒事件や水俣水銀公害などもみな同じように、常民・市民を守るべき為政者に隠され、抑え込まれてきた。これが不実虚偽と事実隠蔽の歴史ではないのか。王侯貴族の金銀財宝、権力の歴史だけではなく、常民・市民は自らの生業や抵抗の歴史を学び、忘れないことによって、自由、平等、友愛を広げてきた先人の努力を感謝・尊敬すべきだ。

現在、我々がとらわれている因習とは、過剰な商品経済に踊らされ、流行に溺れ孤立し、虚無を一層深めていることである。都市文明の過剰な便利に収斂すれば、人間は最終的な心の源郷、避難場所さえも失う。その自然や山村にすら、人生を楽しく暮らす場が無くなる。今、ポンちゃんの冒険行動は、統合へと向かってきた人間の心の構造が過剰な科学技術の便利により、また情報機器に依存して、知能の分断へと退行する危機に抗う進化史の探求にある。

独立自尊は小菅小学校の校訓である。山民は厳しい自然に挑戦し、共存・共生して、誇り高く暮らしてきた。その生活や生業は三浦梅園が言う深山幽谷に美しく咲く紅の花である。どうか、山民は自然に挑戦する心、冒険心、勇気や誇りを、都市民に学ばせてほしい。弱くなったこのくにの人々の心を、咲く花のように楽しく、幸せに導いてほしい。

湯川洋司（1991、1997）は全国の山村を訪ね歩いた民俗学者だ。彼は、山のむららしさを損なわずに自律的な暮らしの設計が可能になる道を模索することが大切であり、食料を自給する一方、木材を活用しつつ茶・椎茸・楮・三椏などの山の産物を商品化して自律的生活を打ち立てるのが良い、と述べている。ポンちゃんは彼と同じようにユーラシアの山村を訪ねてきたので、彼の温かい想いにはまったく共感する。上野原市西原地区の降矢静夫老師はもとより、丹波山村の岡部良雄さん、小菅村の守屋秋子さん、西原地区の中川智さん始め、敬愛する山民に習って、自律して生業を楽しみ、暮らしていこうと思う。

写真

長野善光寺の六菩薩像

中川さん宅での雑穀脱穀作業。

西原地区の景観。40年以上見てきたが、里山は変わらない。

第14話　起源を探る風狂の旅

なにごとも変はりのみゆく世の中におなじかげにてすめる月かな
さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵ならべむ冬の山里
吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬ方の花をたづねむ
西行法師

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり
舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふるものは
日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり
よもいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず
海浜にさすらへ、去年の秋江上の破屋にくもの古巣をはらひて
やや年も暮、春立てる霞の空に白河の関こえんと
そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて
取るもの手につかず
松尾芭蕉

余の風狂もつとに風邪を招くようになった（ポンちゃん）。長らく世間からの出家を願いながら、家族に未練があり在家のままで過ごしてきた。俗心が抜けず、若干ドラえもん体型なので、情けないかな、風邪を引くようではまだ風狂がか細いのだ。

人類文明の退嬰はいよいよ大津波のごとく押し寄せている。終末時計は午後11時58分になったそうだ。近未来はどうなるのだろうか、引き波は何を奪っていくのだろうか。海の底の流れは緩やかであろうが、海面の潮流はせわしなく蛇行していく。夢の超特急の現代社会は巨大に膨れ上がった不安から、世界中で数知れぬ悪意が満ちてきている。人々は教養と信仰に対する信義を衰微させてしまった。

多くの人々がそうであったように、余も旅に拠って学びを深め、教養を積んだつもりだ。穀物、雑草、一年生植物の起源を探ることが、植物に依存する人類の古代文明の源流へと遡り、そこから原理・原則を学び直し、生き物の先真文明の時代を誠実に暮らすことにつながるのだと考えるようになった。北極星は地球から見れば、ほとんど不動で大海原を旅するには良い道標だ。原点、原郷、原典こそが温故知新、混迷の現代文明を真文明へと導き、メービウスの環から脱して、再生の鍵を与えてくれるだろう。

表層の流行に追われ、走り続ける世相、これを生物学にたとえて言うと、生理学でぶっかけ実験をすれば、それなりに植物は反応して、これを機器分析にかけると限りないデータが出てくる。短い論文は短期間に増産される。しかし、それは消費・廃棄されるにすぎず、ほとんど残ることはない。これが嫌になったのは、20 代前半のことであった。そこで生態や形態の遺伝進化学の方向に進むことにした。機器分析よりも、野外で観察、実験することで、確かな事実による植物の生活史を明らかにしたかった。長期間のかかる実験であり、論文の量産はできない。さらに、植物と人間の関係史を求めて、民族学の領域に踏み込んだ。人生の学問の旅に限りはない。

このくにでは教育を再生すると言いながら、いつまでたっても所詮は有名校に入ること、受験

での成功に関心を置いているにすぎず、教育、学ぶことの本質を見失ったことへの反省はない。学びの根源、人生に求めるもの、本質こそ大事だ。自由に探究する楽しみ、幸せに暮らすこと、家族や地域、世の中の役に立つこと、学びの本質はここにあるのではないのか。有名校に受かったからと言って、それはほんの一握りの人にとっての、しかも単に始まりにすぎず、幸せで意義のある人生は、それで手に入るわけではない。短い人生でも、それは一連の時間だ。学校など行かなくても、学びの機会はいくらでもあるし、幸せになることはできる。20 万人余りの非登校の子どもたちがなぜ学校を嫌がるのか、いじめが無くならずに自殺に追い込まれるのか、大人社会の根本の要因を見ないふりで、避けていては、子どもの未来もこのくにの将来も危うい。家族や地域社会を守ること、人任せではいけないんだ。地域創成などと言って行政任せ、憲法改正と言って政党任せ、市民やこく民が主体であるはずだ。湯水のごとく税金を無駄遣いしないで、もっと自分で学び、考え、細やかな私財や私力で社会のためにも働くことだ。

かつて若い頃、旅は風任せであった。次は自分で計画するようになった。老いてきた今は旅行会社任せである。人任せはとても楽である。しかし、そこに退行が潜んでいる。このくにの人々は、人任せばかりするようになった。最近では AI とまで言い出して、ついに人間はいらなくなってしまう。それが幸せなのか。自律できないように習慣づけておいて、自己責任と言って突き放す、世間は冷酷だ。それが世間であれば、やはり自律して生きるように、自助鍛錬せねばならない。それなら自己の意思する風狂に身も心も任せるべきだろう。

旅での出会いは、自分を育てる。壮麗な自然景観であれ、美しい花々であれ、荘厳な大聖堂であれ、長閑な茅葺民家であれ、上手な絵画や深遠な書物であれ、働く人々や寛ぐ人々であれ、出あった人々、事物、事象はとても愛おしい。温故知新、根源を探る人生の旅を楽しもう。人間は自然が好きだったし、人間は人間も好きだった。そこで、植物と人々の博物館の特別展示では、余の植物の海外調査道具と採集野生植物をお見せすることにした。ぜひ、お越しいただきたい。面白いぜ、旅は！！

写真：　蒙古族の人と内蒙古砂漠化調査、ライ族の人とヒマラヤ登山学校

第 15 話　学術探検の道具

植物と人々の博物館の特別展示では､ぼくの国内外における野外調査での植物採集道具などをお見せしています。小菅村の井狩バス停近く（道の駅を下って幹線道路に出たところ）の植物と人々の博物館に、一度見にお越しください。

調査バッグの中身

野外調査でいちばん身近な道具はデイバッグです。雑穀研究チームなので、millet 社（フランス語ではミレーだが､英語では雑穀の意味)のものを愛用しています｡機能性も良いのですが、millet であることにより意味があります。このバッグの中には、調査行動に必要ないろいろな道具を入れています。

カメラは 2 台持っています。景観や植物などを撮影するためには、ニコンの一眼レフ F2 フォトミックを使ってきました。就職したてに、高くてとても買えなかったので、先に就職していた妻女にボーナスで買ってもらいました。高山、砂漠、熱帯雨林、ラフロードなど、どこでも信頼を裏切らずに、綺麗な写真記録を残してくれました。本体は岩やジープなどあちこちにぶつけて傷だらけですが、1 回オーバーホールしただけで、今でも使用できます。ただし、ボタン電池なので、新宿駅近くの中古カメラ屋で電池は買わなければなりません。現在は、ぼくも残念ながらデジタル化に負けて、キャノンの一眼レフ EOS-Kiss を使っています。もう一台は、調理や人物を一瞬で手早く撮影するために、ハンディなオートカメラを使いました。アサヒペンタックス、キャノンオートボーイ、最近はキャノン IXY、どれも荒い使用に耐えきれずに、すぐに壊れて、それぞれ 2～3 台ずつ買い換えました。こうしてみると、ニコン F2 は最高のカメラでした。フィルムは植物や景観撮影用にコダクローム ASA64、および調理用撮影用にコダカラ—ASA100・400 およびモノクロも著作の印刷写真用に、目的によって各種使いわけていました。カラー印刷はとても高かったからです。

調査記録のためには、野帳スケッチブック、ボールペン、シャープペンシルなど、必要に応じて名刺も英語版で作っていました。スケッチブックは方眼紙なので、地図を描くのに便利です。

手ごろな薄さ、大きさで、規格もそろい、使い易いです。

植物採集のための用具は、根ほり、剪定鋏です。特に根ほりは場合によっては護身用武器になります。もちろんこうした目的には使用しないで済みましたが、ちょっと危ないこともありました。植物やその種子を採集するために、竹製野冊、収穫袋、種子袋、ビニール袋、これらに書き込み記録するためにマジックインク、袋を封じるホッチキス、針を持っています。いずれも予備が必要です。収集種子は変異個体を区別して収集し、また現地共同研究機関と折半するので、収穫袋（パラフィン紙製）、種子袋（丈夫な紙製）は千枚単位で持参しています。

ちなみに、植物展枝・乾燥用には現地で古新聞を買います。しかし、古新聞は包み紙にするなどの用途があり、なかなか入手困難な場合があります。長期にわたって、高温多湿地域を調査する際には、植物標本はビニール袋に入れて、エチルアルコールを加えて封入します。イスラムの国ではアルコ―ルは禁止なので、入手困難です。アルコールが切れるとカビが生えて、標本を捨てることになります。乾燥地ではできるだけ新聞紙に挟んで乾燥させます。すべて移動中に行うので、朝夜と梱包作業に時間がかかります。

測定用具は定規、メジャー、高度計、方位磁針、野外活動用時計などです。聞き取り調査や行動中の記録を録音テープまたは IC レコーダーに吹き込みます。しかし、調査後にテープ起こしをする時間が取れないことが多いので、できるだけ、野帳に記録することにしました。揺れ動くジープの中で、字を書くのは困難で、後で見て、自分の字ながら読めないこともあります。地図はとても重要で、日本でドイツ空軍制作などのものを購入していました（GPS はありませんでした）。また、現地でも購入しました。ただし、地図は軍事に関係するので、気をつけないと怪しまれます。空港でカメラを使用すると、フィルムは没収されました（今はめったにないですが）。日時場所を行動中に記録し、その夜のうちに行程を地図上で確認しておきます。どこで何を採集したかの記録は重要です。

ヘッド・ランプは早朝、夜に必要です。自動車のランプが壊れて、雨の夜にヘッド・ランプで走ったこともあります。小傘も欲しいです。財布、時計、パスポートは常時無くさないように身に着けています。

調査資材や生活用品

資材は、調査用紙、野帳、カメラ２台、乾電池各種、録音テープ、写真フィルム各種、ルーペ、さく葉標本乾燥用古新聞紙、標本保存用のアルコール、防虫剤、蚊取り線香。熱帯病医薬品は日本製を持参するが、抗マラリア薬、スポーツド・リンク粉末などは現地の薬局で購入します。耐性マラリアには日本製のものでは効かない場合があるので、現地製のものと交互に飲む。生活用具は軽登山靴、サンダル、アルコール・コンロ、コップ、ナイフ、ヘッド・ランプ、シェラフ・カバー、防蜂網、裁縫用具、封筒、報告書用紙、電卓、辞書など。生活用具はできるだけ現地バザールで購入します。寒い高山ではシェラフを、暑い低地ではシェラフ・カバーを使います。登山靴は汎用のために、軽登山用が良いです。宿泊時には素足、サンダルが便利です。嗜好品は、ウイスキー、タバコを免罪店で購入して持参します。禁酒法があったり、飲酒の習慣がなかったりで、現地調達ができません。長い夜に疲れた心身を安らげるには酒が必要です。タバコは村人や運転手と親しくし、休息のために一緒に吸います。パイプ・タバコやビリも時々吸いました。

セミナーなどで、調査研究について話すことを求められるので、35 ㎜スライド、論文別刷（USB や DVD はなかった）を持って行きます。

調査旅行は数カ月に及びますので、スーツ・ケースには、旅行用品、調査用品（フィルム、野帳、収穫袋、ビニール袋各種）、医薬品、衣類などを入れています。小旅行用には登山用ザックを使用します。帆布製の信玄袋は収集した種子や植物標本を運ぶために持って行きます。ブリキ衣装缶はバザールで購入し、収集種子や植物標本を入れて、別送品で日本の港湾の植物検疫所に送るために使います。

＊　調査で収集した、植物標本、写真記録、音声記録、民具、書籍、調査票、報告書などはすべて、植物と人々の博物館にアーカイヴとして整理して、残しますので、ご利用ください。なお、収集種子は東日本大震災時の計画停電、放射性物質汚染を避けるために、すべてイギリスの王立植物園キューのミレニアム・シードバンクに移管しました。ごく一部をローカル・シードバンクとして、トランジション・タウン藤野のお百姓くらぶに移管しました。農業生産法人藤野倶楽部の無形の家に種子保存冷蔵庫 2 台、森とむらの図書室藤野分室（農林業書籍 1500 冊）を置かせていただいています。また、JR 中央線藤野駅のホームの北側に畑もお借りして、日本村塾自給農耕ゼミ、雑穀栽培なども開催しています。

写真：道具展示。地球外生物 ET は 3000 歳の若い植物研究官で、ミレニアムごとに地球の植物をモニタリングに来ています。ごみ処理ロボット WALL・E が地球に残り、植物を育てたので、人類は宇宙から帰還して、再び農耕文明を始めました。ナウシカは腐海の謎を知ったが、トルメキア戦役が終わってからは風の谷に帰ったとも、森の人の元に去ったとも伝えられています。

第 16 話　ポンチャン最後の冒険

『ファイマンさん最後の冒険』（Leighton 1991）になぞらえて、ポンチャン最後の冒険について書いておきます。ちなみに、R.P.ファイマンさん（1918～1988）はアメリカの理論物理学者で

ノーベルプライザーです。趣味のバンド仲間と一緒にユーラシア大陸のおへそにあるチューバ自治共和国に行くことにして、悪戦苦闘の過程を記した冒険記がこの本です。チューバは、モンゴル人民共和国の北西に隣接してあります。あるいは日本人と一部同祖だったのかもしれません。残念ながら、ポンチャンはファイマンさんと同年 70 歳になろうとしており、趣味の冒険仲間もおらず、もう、チューバにキビを求めての学術探検旅行はできません。そこで、別の最後の冒険を思いつきました。

若い皆さんには怪訝な顔をされますが、ポンチャンの人生のかなりの部分は、指導教官阪本寧男老師からキビの起源と伝播の研究に誘導され、それで決まったのです。この人は、「自分はやっと消えゆく雑穀に間に合った男だ」と無責任にも嘯きました。つまり、ポンチャンは研究人生の最初から、消えゆく雑穀に間に合わなかった男だということになります。しかし、飛び込んだ以上は、必死で尾っぽくらいには掴まらなくてはなりませんでした。誰からも認知・評価されることのない研究課題、先行きの不明な迷宮に飛び込むことになりました。この課題は今となってはとても壮大なもので、才の乏しいポンチャンの短い人生では十分に解き明かせませんでした。第四紀になって人類と植物がどのように関わったかの歴史をたどることですから、内容的にはとても面白いです。

ポンチャンは無職ですが、でも毎日、百姓、売らない作家としての仕事は沢山あります。売れるような本は書きたくない、自分が書きたい本を書くことにしたのです。ささやかな研究成果を余生でもって 5 冊の本にして、ただし売れるような内容の本ではないので、印刷されることはないでしょうから、インターネット上で順次公開しています。

さて、そこでポンチャン最後の冒険は、唐突に聞こえるかもしれないですが、日本国憲法に、自分の食べ物は自分で得る生業原理を加えるように提案することです。かつて、環境教育を促進するために、環境教育推進法を提案して、超党派国会議員立法をしていただきました。世の中が環境課題にあまりに無関心であったから提案したのですが、環境教育推進法ができても、さほどの普及啓発効果もなく、地域環境も地球環境も改善されず、残念に思っていました。その時に議員立法を提案したのは環境文明 21 の藤村コノエさんらとでした。この政策提言 NPO はその後も引き続いて日本国憲法に環境原則条項を加えるように調査研究を続けてきたのです。ポンチャンは最後の冒険として、もう一度お手伝いすることにしました。環境課題は解決に向かうどころか、一層厳しさを増しています。自分も、人類も、他人事として傍観している持ち時間がほとんどないです。楽しくも、美しい素のままの暮らしを未来に求めるのなら、この冒険には大きな意義があります。

ポンチャンの環境政策は高木文雄老師から実践で教わりました。彼は海軍主計士官としてシンガポールで敗戦を迎え、捕虜になりました。その後、大蔵次官、国鉄総裁などを経て、森とむらの会会長や本会・自然文化誌研究会の会長もしていただきました。30 年近く、親しく教えを受けましたので、ポンチャンは植物学者の境界を越えて、環境教育政策を考えるようになりました。ちなみに、父は敗戦直前の 3 カ月を呉の海軍に、祖父はシベリア出兵で陸軍に徴兵されました。幸いなことにポンチャンは敗戦後の平時に生きてきて徴兵はされてはいません。

ごく少数の人々の民間研究者の提案努力を除いて、当時の敗戦後政府や復活政党の提案は GHQ(連合国軍最高司令官総司令部)の日本民主化の意に添わず、日本国憲法はいわゆる GHQ の押し付け憲法と言われ続けてきました。しかし、70 余年もたてば、よほど馴染んできて、押しつ

けであっても合意したと同じような様態になって、大方の無関心を得ているのだと思います。最近、西鋭夫さん（2018）の発掘されたGHQ憲法草案の原本を読んで、日本では隠蔽された当時の状況がアメリカ側の記録メモに基づいてやっとわかりました。

日本国憲法は主権在民や基本的人権をうたっているのですから、いつまでも押し付け憲法だという人々がいるのなら、なおさら明治初期の五日市憲法提案などのように、国民が十分に学び、話し合い、憲法の加筆修正や改訂をしたら良いです。とくに、現憲法に含まれていない環境原則に関しては喫緊の未来課題であるのですから、多くの方々に関心を持っていただき、一緒に学び、考えていただきたいです。

戦争は食料の奪い合いから始まります。20世紀だけでも約1億人が旱魃、戦争や失政にともない餓死してきました。急増する人口（2018年9月5日現在約75億人）と食料問題は知性によって対応・解決すべきで、戦争によって制御すべきではありません。そうであるのなら、自分の食べ物は自分で得る生業原理は強く再確認され、広く合意される必要があります。何でも金で買えば済むのではなく、日々の暮らしを支える生業は楽しい人生を保障します。市民農園（クラインガルテン、ダーチャなど）を拡大し、家族の食料の一部でも面白く栽培するべきです（写真）。

ポンチャンも最後の冒険について次のシンポジウムでお話しします。日頃立ち入ることのない国会議員会館ですが、是非見学もかねて、お誘いあわせてご参加ください。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

環境文明21シンポジウム　憲法に環境（持続性）原則の導入を!!　～改憲論議は“9条問題”だけではない!～

この夏の猛暑・豪雨・大気の不安定などが示すように、 地球環境が危機的に悪化し、貧困・ 格差など社会の持続性が危ぶまれています。しかし、現状の日本国憲法では、「環境」あるいは「持続性」 について、一言も触れられておらず、次世代の子どもたちに、 安心・安全で健全な環境を残すことが困難な状況です。シンポジウムでは、家族・地域・国レベルでの食の安全保障、 リニア問題などの観点から、憲法に環境・ 持続性原則を導入することの必要性について、 皆さんと議論します。そして、今こそ、日本国憲法に環境・ 持続性原則の導入の必要性を訴えましょう。

日時：11月6日（火）、受付11時開始、11時30分　～14時30分

場所：衆議院第一議員会館　第一会議室（定員50名）

主催：NPO法人環境文明21

プログラム（予定）

（１）ＮＰＯ法人環境文明２１の提案についての説明、加藤三郎さん（NPO法人環境文明21顧問）

（２）話題提供「憲法に環境・持続性原則が導入されることで何が変わるか」

①家族・地域・国レベルの食料安全保障と環境、東京外国語大学AA研究所フェロー、木俣美樹男さん。②リニア新幹線の問題点、慶応大学名誉教授、川村晃生さん。③諸外国の憲法における「環境」の位置づけ、中央大学教授、石野耕也さん。

（３）全体討議、藤村コノエさん（NPO法人環境文明21代表）

（2018-9-4）

写真：小菅村のポンチャンのダーチャ（守屋秋子さんにお借りしている畑）、雑穀栽培見本園

第 17 話　ポンチャン冒険の始まりの再発見

ポンチャン（ぼく）の冒険は伊豆半島への野宿旅行から始まりました。この旅の意味は、今になってやっと分かったことなのですが、小説よりもはるか奇なることに、三人の立派な先達の事績が伊豆半島で地理的かつ心情的につながったのです。

静岡県立有用植物園

大学に入学したばかりの 1968 年の夏、学生サークル児童文学研究会の合宿が伊豆の松崎の寺で行われました。ぼくは高校生の時にたくさん小説を読んで、小説に飽きていたので、大学生になってから童話に興味を移していたのです。合宿前日に、2 年先輩の細川さんが土肥の網元の家の出だったので、土肥の海岸で男子学生 4 人だけでキャンプをしました。研究会の合宿終了後、ぼくは黒田君と伊豆半島を巡る野宿旅行をしました。ある神社の社殿の軒下で寝ていたら、深夜、白猫が走り去ったので、民俗的恐怖を覚えました。翌朝は、東海バスの始発で、県立有用植物園に古里和夫先生を訪ねました。早朝、開園前にもかかわらず、園長自ら快く、礼儀知らずの若者を案内してくださいました。

当時、ぼくは大学裏の里山にアケビを見つけて、その実のおいしさと形の奇妙さに感動して、バナナのように食べられる種無しアケビを作ってみたくなったのです。そこで、まず練習として種無しスイカを作る事を試みました。2 倍体のスイカの苗にコルヒチンをつけて 4 倍体にし、元の 2 倍体と掛け合わせて 3 倍体の種無しスイカにするのです。大学キャンパスのはずれの山林地に焼畑を造り、スイカを育てていました。もちろん、理学部の近田先生の許可を得て行ったことです。このことをお話したら、古里先生からスイカの花粉を所望されたので、花をお送りした記憶があります。

夏休みに、同級生の藤村君と久保さんは三島市にある国立遺伝学研究所でアルバイトをしていて、同じく大学闘争に飽きていた私に同研究所の阪本寧男先生を紹介してくれました。彼はエチピアの海外学術調査から戻られたばかりであったので、2 度ほど大学で講演をお願いしました。貧乏学生の私たちは何のお礼をすることもできず、考えすら及ばなかったところ、和田先生がフォローしてくださいました。

また、当時は知りもしなかったのですが、古里先生との知遇によって、ぼくは国立遺伝学研究所の阪本師の弟子になることができたようです。最近の手紙（2019）に、古里先生の推薦がなければ、ぼくを受け入れる気はなかったと書いてありました。彼は木原均｛注：パンコムギの起源を明かした世界的に高名な遺伝学者｝の最期の助手であったのですが、当人が自称するように相

当の天邪鬼だから、弟子などはもたないと考えていたのでしょう。失礼ながら、孤高の農学者とまで称されたように、世間とは相当ズレていて、旧制中学校生で経験した戦中および敗戦直後の体験によって世俗の名利にはそれなりの反感を持っていたのだと邪推します。彼の薫陶を受けたお陰で、人見知り強く、世間に疎くいたかったぼくの性癖はさらに助長されました。

この体験は彼の人生に大きな心の傷を与えたようで、ごく最近の手紙にも食料の買い出しで経験したいやな思い出を重ねて追加記述してありました。京都近郊の農家は、京都人が持ち込む高価な物品としか、食料を交換してくれなかったそうです。したがって、地元民は配給が不足するときは、遠くまで食料を買い出しに行かなければならず、うまくサツマイモを入手できても、警察に取り締まられて没収されてしまうのです。

ぼくの祖父の実家は稲作農家で、濃尾平野の木曽川のほとり、輪中の中にありました。一大稲作地帯ですから、ここから親戚として戦争中も食料は分けてもらえていたようですが、それでも敗戦後には、もらってきたイネ米も警察に闇米として没収されたこともあったようです。この祖父は徴兵されてシベリアに出兵し陸軍上等兵で、父も戦争末期に徴兵されて、呉の海軍新兵で敗戦を迎えました。名古屋市は焼夷弾で焼き尽くされ、その恐怖は祖母や母から聞かされたところです。名古屋市の道路が広いのは、爆撃で街が破壊し尽くされたので、新たな都市計画の線引きが容易だったからのようです。

さて、ぼくは 7 月いっぱいで自動車運転を止めることにしたので、廃車にする前に伊豆半島を巡ることにしました。2019 年 6 月に吉奈温泉に 2 泊して、南伊豆を走りました。事前に旅館の人に、観光ガイドに載っていなかった県立有用植物園について聞いたのですが、要領を得ません。その際に、インターネット検索をしたら、研究報告の記事はあるものの、植物園の存在は不明でした。帰宅後、さらに詳細に検索したところ、1950 年に南伊豆町石廊崎に開設された有用植物園はたびたび改称されて、今では南伊豆亜熱帯公園として一般公開されています。いく人かの個人史が不思議なことにぼくの興味と結びついたので、7 月にもう一度吉奈温泉に泊まって、沼津市西浦の興農会農場跡を訪ねました（写真）。

日本村塾教育

ぼくは植物と人々の博物館の読書会として、日本村塾セミナーを提唱しているので、時々ネット検索をして、日本村塾の内容確認をしていて、『日本村塾教育』（1935）という本があることに気が付きました。著者の大谷英一はクリスチャンで、太平洋戦争が始まる直前の 1935 年にこの本を書いています。この時代に、よくぞ書いたものだと驚くような内容で、現在のぼくの考えにとても近いように感じました。

大谷の略歴は次の通りです。九州大学農学部で農業経済学を学び、1931 年に文部省嘱託としてドイツとデンマークに留学、帰国後、伊豆半島の久連（原沼津市西浦）の国民高等学校の経営にあたり、1937 年、インドで開催された YMCA 世界大会に日本代表として出席しました。戦争中に、当局の圧力があり、それに屈して大政翼賛会に協力したことを悔いて、敗戦後の 1946 年に校長職を辞して郷里の栃木県に戻りました。その後も、地元で農民教育に尽くし、矢板市の第 4 代市長（1974～88 年）になったようです。大谷の著書『日本村塾教育』は国会図書館で複写してもらい、読了後に、インターネット検索で見つけて、関連した古本『新興村論』（1936）、『平和の國デンマーク』（1948）とともに 3 冊を購入しました。しかし、『日本村塾日記』（1935）は見つかりませんでした。

そもそも、日本村塾教育の実体は昭和初期に静岡県田方郡西浦村久連（現沼津市）にあった興農学園、久連国民高等学校のことでした。デンマークのキリスト教主義に基づくフォルケホイスコーレ folkehøjskole／folk high school を模範として、久連に農場を所有していた渡瀬寅次郎の遺言で、遺族の資金提供により、彼の札幌農学校における旧友、内村鑑三や新渡戸稲造らが協力して、1929 年に設置されました。初代校長は平林広人で、青年を対象に共同生活のなかで、農民の実生活に即した教科・実習が行われていました。

1933 年に財団法人興農学園となり、久連国民高等学校と改称し、大谷英一が二代目校長になりました。豊かな農業国デンマークの理想を求めて、全国から総計約 200 名の生徒が集まり、柑橘栽培の研究、講習会開催などをして、地域にも貢献していたようです。ところが、第 2 次世界大戦が激しくなるにつれて、政府から国粋化の圧力を受けて、1942 年には農道塾と改称し、1943 年には実際の教育活動は停止しました。敗戦後、大谷は興農学園を再興することなく、故郷の栃木に戻りました。その後を受け継いだのが古里和夫で、1955 年からしばらく柑橘の研究や海外の樹木、コルクガシやエリカなどの保存・公開を行っていたと言います。

人々をつないだ心と場

古里先生の経歴について書かれた文献は国会図書館で探しました。古里先生は興農学園農場を継いで、その後、上記の静岡県立有用植物園長、浜松市のフラワーセンター長を順次歴任されていたのです。ぼくが出あったのはこの頃で、1968～1969 年のことでした。彼は 1912 年に岐阜県で生まれ、千葉高等園芸学校を卒業してから岡山県で女学校教員、1940 年に京都帝国大学農学部（木原均研究室）を卒業、南洋興発株式会社で研究開発・農場経営、敗戦後フィリッピンから帰国、1946 年に木原生物学研究所研究員、同年に興農学園長になり、1954 年に国立遺伝学研究所研究員、1960 年に柑橘類の細胞遺伝学的研究で農学博士、1961 年に静岡県立有用植物園長、1971 年に浜松市フラワーパーク公社公園長、1993 年に永眠されました。この間に、ハワイ、北アメリカ、ポルトガル、カナリー島、マディラ島、南アフリカ、南アジア、オーストラリア、ニュージーランド、中央・南アメリカ、中国などで、有用植物調査を行ってきました。

ぼくはほんの 2、3 回お目にかかっただけだけれども、こうして略歴を見ると、木原学派の流れで同じアカデミック・ファミリーであり、つくづく冒険人生の出会いの不思議さを知り、多くの方々の支えられて自由な生き方ができたことに、改めて感謝の念を強くしました。

デンマルク国の話

興農学園の創業を求めた渡瀬寅次郎はクラーク博士の直接の薫陶を受けてクリスチャンになり、その後、種苗会社で成功しました。彼は晩年、キリスト教の教えを基礎とする農学校を創立したいと願い、遺言で内村鑑三らにこのことを託しました。内村は札幌農学校での一年後輩であったからです。渡瀬がデンマークの農学校に思い至ったのは、デンマーク研究者の平林広人のラジオ放送「丁抹の文化について」を病床で聞いて共感したからで、一方、平林はデンマークの国民高等学校を日本に創りたいと考えていました。平林が銀座教会で内村に会った際にその想いを聞き、内村は賛成して、彼を渡瀬に紹介したのです。

日本村塾教育の思想は内村鑑三の著書『デンマルク国の話』（1913）の影響を強く意識していました。さらに、その大元にはグルントヴィ（N.S.F.Grundtvig）のキリスト教理解があり、農民が高い学問を身に付けなければ、民主主義は衆愚政治になると考えて、ケンブリッジのカレッジをモデルとした「生のための学校」を求めたのだそうです。生きた言葉で語り合い、それぞれ

の生を深めていくことが目的であれば、資格や試験、単位などは不要だとグルントヴィは考えた。デンマークの国民高等学校は 1844 年に最初の試みが始まった。内村は平林からデンマークのことを多く学び、彼にこの世でなすべき最後の仕事である興農学園を託して、1930 年に他界しました。

イギリスのケンブリッジ大学のカレッジをモデルとした「生のための学校」を求め、生きた言葉で語り合い、それぞれの生を深めていくことを目的とし、資格や試験、単位などは不要というグルントヴィの考えは、ぼくの日本村塾 Nihonmura College for Environmental Studies の基本姿勢とまったく同調・共鳴します。ぼくは、日本ではもうさっさと受験教育をやめて、幸せに生きる学びを求めてほしいと考えています。自然文化誌研究会とともに行った 40 年以上の環境学習実践にもとづいた考察により、単なる環境教育の原理の到達点ではなく、現代の人々の生涯学習の統合原理として環境学習原論を提案しました。

しかしながら、日本村塾の 3 ゼミ（民族植物学、扶桑民、自給農耕）への参加者はほとんどいませんので、実際はウェブ上の塾になっています。日本では資格が得られる学校でなければ、教育や学習は認知されないということで、学校化社会は極まって固定してしまっているので、自主独立した学びの場はほとんど成立しないのです。ただし、自然文化誌研究会の冒険学校はほぼ常設化して、山梨県小菅村で継承されているので、少数の子供たちに対しては役立っているのだと思えます。（詳細内容、文献などは、ホームページのエッセイに記載しました。）2019-7-22

写真：興農学園農場跡の石碑と西伊豆から駿河湾を望む

第 18 話　ヨーロッパの美しい村や街を訪ねて

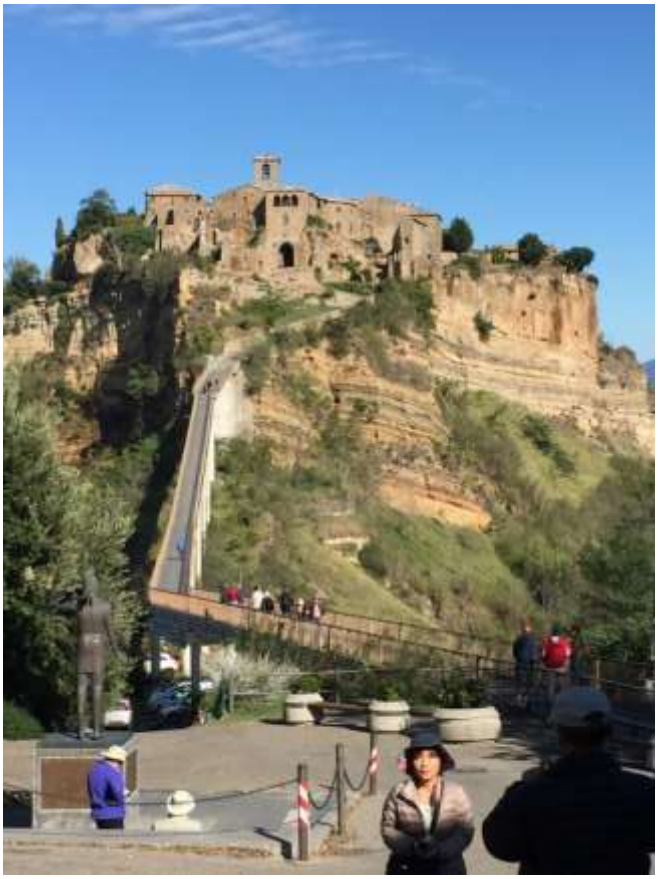
ユーラシア大陸のアジア地域における雑穀の起源と伝播について 20 世紀後半に現地調査をしてきましたが、21 世紀に入った頃から、ヨーロッパ地域に出かけることが多くなりました。現職の頃の旅の目的は調査研究ばかりでしたので、退職したら家族のお供の者として観光旅行をする約束をしていました。個人旅行で、どこかの国の特定の街に一週間程度宿泊して、周辺の街や村を訪問していました。ところが、しばらくして老化のため体力も怪しくなり、またヨーロッパの社会不安も高まってきたので、大手旅行会社のツアーに参加することにしました。しっかり企画された 1 週間程度の広域旅程の中で、それでも密かに自分の興味に沿う事柄をなんとか見出しました。たとえば、マーケットでの雑穀販売、農耕地で雑穀の栽培状況や雑草の種類などを観察してきました。現地のマスター・ガイドの蘊蓄はさすがに面白いです。この数年間に、いくつかの国で美しい小さな村や街を訪問しました。そこで、日本の村々の有り様と比較してみようと思います。

テレビ・プログラムのドキュメンタリーで、イタリアの小さな村の物語を見て、いつも個人、家族、村人の人生における温かい暮らしぶりが丁寧に描かれていて、心が安らかになります。誰の、どの家族の物語も苦難の時はあったし、今も苦労は絶えることはないのですが、個人の思い、家族の願い、村人の交わり、これらが暖かく語られて行きます。経済的に貧しいと言いながら、家内の調度は堅実に整頓してあり、マンマの暖かい手調理が供され、子供たちは高等教育も受けています。大きな街で医師、料理人や技術者として良い職につけるのに、あるいはついているのに、相応の人々が生まれた村に戻り、自然に抱かれ、家族との穏やかな暮らしを受け継ぐことを選んでいます。ヨーロッパ人の近代精神の自由と平等は個人の自律で、その個人こそが友愛に溢れ、これによって楽しい地域共同体社会が形成され、維持されているのでしょう。

そのように理解すると、ぼくはこの日本の国や村に欠如しているのは、個人の自律だと思うようになりました。自律していることは孤立していることではありません。もとより均質的な生き方でもありません。もちろん、自律するためには経済的自立が必要で、なんらかの職業や産業がなければなりません。日本の農山村では家族農業をしながら、他の仕事を兼業し、自然環境保全

や伝統知継承、居住地・第一次産業従事者として直接支払制度の保障を権利として政策的認知を受けても良いと考えます。また、行政などから委託された度重なる地域調査の結果から可能性のある産業として、単なる観光業ではない複合的なエコスタディ・ツーリズムを提唱してきました。自然離れした都会人に自然の美しさや生業技能、伝統的知識体系を伝えることでいくらかのガイド収入が得られれば良いと思います。また今、ぼくはこの国に生業の自由や食料自給の権利を憲法で保障するように求めたいのです。幸福はそのままの美しい暮らしにあるのだと知れば、現代日本の貪欲な都市文明病は気候変動にも対応でき、改善するのだと思います。

イタリアの村： 2017 年に訪れた Civita 村は地震で道路が崩れた城塞都市（街）。三方が崖で、城塞を繋ぐ道路が壊れて孤立しました。現在は観光客が橋を歩いて訪れるようになっています。近隣の村では有機農業が熱心に行われているようですので、在来品種種子の自家採種などについて現地のマスター・ガイドさんに聞いてみました。



フランスで最も美しい村： 2014 年に、モン・サン・ミッシェルへと向かう途上で、立ち寄った美しい村 Beuvron-en-Auge は、街道沿いの小さな村で、素のままの美しい暮らしがあると感じ、とても気に入りました。広場を中心に小さなお店が並んでいます。観光客のために特段の何かをしているようには見えません。訪問時間が早かったのか、村に一軒あるパン屋さんも、大方のお店も閉まったままでしたので、ビジター・センターで Calvados（リンゴの蒸留酒）と Cidre の小瓶を土産に買いました。

2019 年にニースに行く途上で立ち寄った Roussillon 村、ここでは茶色系の絵の具になる土が採掘されるのです。地中海気候の林に赤茶色の露頭が現れているのはとても美しいです。丁度、写真の民家の壁の色のようです。村では絵の具なども売っています。涼しくなったので、また絵

描きを再開しようと、土絵の具の 8 色セットを買いました。丘陵の反対側には別の美しい Gordes 村もあります。

フランスで最も美しい村協会に認定されるには、人口が 2,000 人以下、文化財が 2 つ以上あること、美化に努めていることなどの条件があります。現在 156 の村が認定登録されています。

イギリス一美しい村： 2017 年に湖水地方やコッツウォルズに行きました。Chipping Camden ははちみつ色のライム・ストーンや茅葺で造られた家並みが美しく、Bibly はウィリアム・モリスがイギリスで一番美しい村と言ったように、何百年も続く家並みも家庭菜園もよく手入れされています。キツネノテブクロが美しく咲いていました。ここの景観を刺繍の題材にし、また電子書籍『環境学習原論』の表紙にしました。

ドイツ・ロマンティック街道： 2015 年に、ロマンティック街道でノイシュヴァンシュタイン城に向かう途上の Rothenburg は小さな村ではないのですが、中世 10 世紀以来の自由都市の街並みが美しいので、参考までに載せておきます。街道を訪問した証明書をもらうことが出来ました。

ポルトガルの一番美しい街オビドス： 2019 年に行った Obidos は城壁に囲まれた小さな街(村)で、家並みを飾る花々が美しく、谷間の真珠と呼ばれています。白壁にシンボル・カラーの青と黄色のラインが映えます。

何百年も維持継承されてきた家並みが美しいのは、石造りだからでしょうか。木造では家並みを保存できないのでしょうか。よく見ると、ヨーロッパの家造りにも、木材が梁や床材によく使われており、すべて石で作られているのではありません。耐火性に優れているとはいえ、不燃ではないようです。明るい色調の美しさも、地域の居住者の合意によって維持されているのでしょう。日本の村は良く言えばわび・さびの世界か、どうしてもくすんでいるように見えます。とはいえ、白川郷の景観は美しいです。

素のままの美しい静かな暮らしが維持されているところもあります。一方で、観光化、さらに商業主義が行きすぎて、訪問者が多すぎる、外部からの商品・商店にとって代わられる、など、居住者にとっては良いことばかりではないようです。観光受け入れの適正規模がどの程度か、適切な内容は何かなどの住民間の合意は必須でしょう。日本の村では、残念ながら容易に合意形成はできず、国からの直接支払保障や投資もあまりに少ないようです。山間地が多い日本では治山治水への対処も必要です。旧世紀の呪縛を解き、孤立したムラ社会や行政依存の態度は改めて、村民は自立した村づくりを意思すべきです。日本にも美しい村が維持されることを村人の努力はもとより、行政に対して社会的共通資本にたいする基盤的投資と政策実現を求めたいです。